

なぜ日本のキリスト教は反日左翼的なのか? : 神学における「日本」の問題¹

藤 原 淳 賀

序

1. 文化とキリスト教信仰
 2. 預言者的伝統と祭司的伝統
 3. 明治期のキリスト教指導者と愛国心
 4. 日本の神学 (Japanese Theology) と日本の神学 (Theology of Japan) : 北森嘉蔵、大木英夫・古屋安雄
 5. なぜ日本のキリスト教は反日左翼的なのか : 反日左翼とキリスト教の親和性
 6. 文化の変革 : 日本のキリスト教に欠けているもの
- 結論

序

「日本のキリスト教はなぜ反日左翼的なのですか?」と聞かれることが何度かあった。そう言われれば確かにそのような傾向があると感じることが何度もあった。気になって何人かの牧師、信徒、研究者に聞いてみると、同様にそのような傾向を感じている人が一定数いた。しかもそれを公に発言することが憚られる雰囲気があるという。カトリックの友人たちは、カトリックにも左翼的な人はいるが、カトリックよりもプロテスタントのほうが左翼的であると感じていた。

日本のキリスト教は人口の僅か1%程度に留まっている。また日本のキリス

1 本稿は、日本基督教学会第72回学術大会（於：関西学院大学）での発表（2024.9.3.）に加筆訂正したものである。

ト教には一種独特の閉鎖的な雰囲気と文化がある。

日本という土壤はキリスト教に合わないという声もある。筆者は青山学院大学でキリスト教概論を毎年数百人の学生に教えている。学生が書いた毎週の授業レポート、各学期4-5回の礼拝レポートを読むとき、かなりの学生はキリスト教の福音をしっかりと受け止めていることがわかる。しかもクリスチアンの学生よりも、初めて福音を聞く、キリスト教に対して身構えて授業を受け始めた学生の方が純粋に福音に反応することが多い。そういった経験から、また牧師としての四半世紀にわたる開拓、伝道、牧会の経験から、さらには青山学院大学地球社会共生学部の教授たちとの交わりから、日本人は、福音それ自体ではなく、「一種独特の閉鎖的雰囲気を持つ日本のキリスト教」に対して心を閉ざしているのではないかと思うようになった。

その一つが反日左翼的なキリスト教であると考えている。日本のキリスト教が反日的である限り、日本人はキリスト教の使信（福音）に対して心を開くことは難しいであろう。そもそも人は、自分たちを嫌い憎む人たちに近づこうとは思わないものである。

本稿は、キリスト教信仰と文化の関係を論じ、日本文化に関わっていくキリスト教のあるべき姿を考察することを目的とする。特に戦後の日本に反日左翼的な傾向があることに注目して考察する。それは反日左翼的であることを「進歩的」とみなす人がいるということと関係しているかもしれない。それが大学を含めた学校教育、マスコミに顕著であることはしばしば指摘されているが、キリスト教会においても見られる現象である。²特に無宗教を掲げる共産主義との関係に注意すべきは、キリスト教としては当然のことである。

反日左翼という語は以下のような意味で用いている。左翼と右翼については、革新と保守、伝統軽視/破壊と伝統尊重/保持、リベラルとコンサーヴァティヴという程度の意味で用いている。また反日は、日本を愛しその伝統をより善く変革するために批判するのではなく、日本を貶めるという動機によって

2 矢沢栄一、『反日的日本人の思想』（PHP文庫, 1999）；ケント・ギルバート、『マスコミはなぜここまで反日なのか』（宝島社, 2017）。

批判するといった意味で用いている。その際、歴史的事実に必ずしも基づかずともとにかく貶めようとする。これらを厳密に定義していないのは、本稿の目的が、日本のキリスト教におけるそのような「傾向性」の指摘と問題提起にあるからである。

本稿は誰かを攻撃するためのものではない。読者の中には不快に感じられる方もおられるかもしれないが、神から私たちにこの地で託されている働きを共に担っていくために、この問題をどうか一緒に考えていただきたい。

明治期のキリスト教指導者には佐幕派の武士階級出身者が多かった。彼らは現実的感覚と愛国心を持っていた。彼らは、伝道、神学、教会形成だけでなく、国家、社会、国際関係、戦争を論じた。³一般社会もキリスト者の発言に一定の注意を払っていた。

戦前は、海老名弾正（1856-1937）の「神道的キリスト教」のようにナショナリズムと結びついた「日本的キリスト教」の試みもあった。その行き過ぎたリベラリズムと日本との癒着は神学的に問題であったといえよう。しかしそういった試みへのリアクションであろうか、戦後は日本の伝統を大切にするキリスト教はほとんど見られない。⁴これはまた逆の意味で問題である。戦後のキリスト教は、むしろ日本文化を反キリスト教的と否定的に見てきた。

戦時中にはキリスト教迫害があったが、戦後日本の教会は、GHQの後押しもあり、キリスト教ブームを経験した。教会には食べ物があり豊かさがあった。キリスト教には自由と希望が感じられた。キリスト教がこれからの日本には必要だと多くの人が考えた。しかしそれは長く続かなかった。人々は教会に押し寄せたが、潮が引くように去っていった。そして現在に至るまで、キリスト者

3 たとえば内村鑑三は『万朝報』で足尾鋇毒事件を扱った。ただ内村は、足尾銅山経営者、古川市兵衛の罪だけでなく、運動家や農民の人の罪の問題も含め、個人の内面が変わらなければならないと考え、社会運動ではなく、福音の伝道を中心に据えていく。

4 もし手島郁朗（1910-73）の「キリストの幕屋（キリスト聖書塾, 1948-）」をキリスト教とみなすなら、その例外的存在となる。また「幕屋」への疑念から、日本文化を重んじるキリスト教から距離を置こうとするものも多いと考えられる。

は日本人口の1%程度に留まっている。

教会派は、「神の御言葉の宣教」と魂の救いに集中すべきであると考えた。社会問題から距離を置き、その活動は教会内に留まった。バルトを読み違えたいわゆる「日本のバルト主義者」の影響があった。

社会派は、社会問題の重要性を認識しており、左翼的傾向があった。これは戦前からそうであった。

福音派は聖書の無謬性、魂の回心に集中し、社会問題から距離をおいていた。しかし、ローザンヌ運動（1974）の影響もあり社会問題に関わることの重要さに目覚めていく。福音派においても社会問題に関わる人々には左翼的傾向が認められる。

カトリックの伝統は広い。4世紀初めまでの迫害を経て、4世紀終わりからはローマ帝国の国教として、社会の維持、文化形成に努めてきた。ラテン語を含めて（かつてはキリスト教を迫害した）ローマの伝統を今日まで最も継承しているのは実はカトリック教会である。16世紀の宣教師たちは日本で茶道を学びまた茶道に影響を与えた。第2バチカン公会議以降は、禅宗との対話等、日本文化に積極的に関わってきた。その一方で、例えばフランシスコ会のように、あるいは解放の神学のように、弱者、周辺立場に立つという伝統がある。前者は保守的（右翼的）であり、後者は革新的（左翼的）といえるであろう。

筆者は、左翼（革新）と右翼（保守）のそれぞれの立場を尊重したい。重要かつ深刻な問題は、戦後の「反日的傾向」である。これについて筆者は、キリスト者および非キリスト者の方々に非公式の場で分かち合っているが、一定数の人たちは同様の感覚を持っている。日本のキリスト教人口は少なく、一般社会からあまり注目されていないが、「日本のキリスト教の人たちは反日左翼的である」という発言がある。

1. 文化とキリスト教信仰

H・リチャード・ニーバーの『キリストと文化 (*Christ and Culture*, 1951)』はプロテスタントのキリスト教社会倫理学の古典である。⁵ニーバーはキリスト教の分類を、カトリック、東方正教会、プロテスタントといった仕方ではなく、「キリスト」と「文化」を基軸として分類した。魚が常に水の中のように、人は常に文化の中にいる。神の絶対的啓示である「キリスト」はわれわれが生きている相対的な「文化」の中に受肉された。ニーバーは、「キリスト」と「文化」の間で「キリスト教」が形成されると考えた。

教会は、2000年にわたり常にその時代の課題に取り組んできた。西洋においては4世紀前半までのマイノリティとしてのキリスト教、4世紀後半から中世にかけてのエスタブリッシュメントとしてのキリスト教、近代社会のエスタブリッシュメントとしてのキリスト教、啓蒙期以降の世俗化の中でのキリスト教という流れを認めることができる。⁶

ニーバーは、『キリストと文化』で、5つのタイプのキリスト教を論じた。「文化に対するキリスト (Christ against Culture)」、「文化のキリスト (Christ of Culture)」、「文化の上にあるキリスト (Christ above Culture)」、「文化と逆説関係にあるキリスト (Christ and Culture in Paradox)」、そして「文化を変革するキリスト (Christ the Transformer of Culture)」である。それぞれのタイプのキリスト教の貢献と問題点を評価しつつ、アウグスティヌスとF・D・モリスを例として取り上げた、文化に関わり文化を変革するキリスト教信仰を最も高く評価した。

5 H. Richard Niebuhr, *Christ and Culture*, (New York, NY: Harper, 1951).

6 ニーバーは、キリストと文化の問題として以下のようなものをあげている。パウロと福音のユダヤ化主義者、教会とローマ帝国・地中海の諸宗教との戦い、コンスタンティヌス帝の情勢安定、主要教理の形成、教皇制の勃興、修道院運動、アウグスチヌス的プラトン主義、トマスのアリストテレス主義、宗教改革とルネッサンス、信仰復興と啓蒙思想、理性と啓示、宗教と科学、国家と教会、プロテスタンティズムと民主主義、プロテスタンティズムと資本主義等。Ibid., 1-11.

戦後日本の反日本文化的キリスト教

反日本文化的傾向を持っている戦後日本のキリスト教は、この5タイプの中で、広い意味で反文化的（Against Culture）的キリスト教の一種と見ることができるであろう。

ニーバーは、このタイプのキリスト教は、キリストの絶対的權威を強調し、文化は墮落したものであるとして文化への忠誠を否定するという。ニーバーは、この反文化的アプローチを以下の3つの点で肯定的に評価している。⁷

第一にキリストの絶対的主權を正しく評価している。第二にこれは初期のキリスト教の典型的な態度であった。第三にこのラディカルなアプローチは、他の4つのアプローチとのバランスをとる上で有益である。地上の權威への服従というロマ書13章が、世も世にあるものも愛してはならないというヨハネ第一の手紙とのバランスの上にあるとニーバーは考えている。

絶対的啓示であるキリストが、この世の文化をそのままでよいと肯定することはあり得ない。事実、この「世（κόσμος）」がキリストを十字架につけたのであり、キリストと文化との対立はキリスト教の必然的な答えである。

しかしニーバーはそれが不適切なアプローチであると主張する。

第一に、反文化的アプローチは、キリスト教を一般社会から分離する傾向がある。「この世離れしたキリスト教」は、マジョリティの文化を拒絶するため、マジョリティの文化に触れることも変革することもできない。社会の変革は、分離主義者によってではなく、社会に関わる人々によって行われてきた。

第二に、反文化主義者たちは、文化のある部分を拒否しながらも他の部分は用いており、一貫性がないという。ヨハネの手紙第一の著者やテルトゥリアヌスは、異教の哲学を非難しながらも、その肯定的な価値観のいくつかを認め、その思想形態や語彙さえも用いている。トルストイは、当時のロシア文化運動の中で著述を続けた。彼らは文化を拒絶したのではなく、キリストの絶対的權威の下で、自らが生きている文化の所与の中から選択し、修正し、自らの貢献

7 Ibid., 45-82.

を加えた。⁸

第三に、排他主義者は罪の深刻さを過小評価する傾向がある。彼らは墮落した世界から自らを分離することで、聖なる共同体を作ろうとする。そこで前提とされているのは、罪はマジョリティの文化に宿り、分離された聖なるキリスト教共同体は罪の影響を受けない、あるいは受けることが少ないということである。しかしながら、教会や修道院、その中の個人や文化も罪に汚染されていることをわれわれは経験的によく知っている。

最後に、ニーバーは三位一体の教義から、この反文化的キリスト教に対して2つの深い神学的批判を行っている。

第一に、反文化的キリスト者は新約聖書のキリストに従うという強烈なアイデンティティを持つ。しかし創造主としての父なる神と、世界と教会を支える聖霊を軽視する傾向がある。ニーバーはこれを「御子のユニテリアニズム」と呼び、三位一体的でないことを指摘する。

第二に、反文化的急進派キリスト者には、墮落した世界を拒絶するあまり、創造者がもともと善きものとして世界を造られたこと、世界には今なお多くの善きものがあるということが十分に見えていない。急進派クリスチャンには、物質的な領域を悪とし、霊的な領域を善とする異端的な二元論的傾向がある。そのため、三位一体の教義を理解できず、文化における神と聖霊の存在と働きを軽んじる。

ニーバーは明確に記していないが、このタイプのキリスト者は、新約聖書に記された1世紀パレスチナに受肉したイエスのみにフォーカスすることにより、よき天地創造における御子の働きを軽視する。そしてすべての文化形成、維持、発展の背後にあり、大いなる都ニネベと右も左もわきまえない十二万以上の人間と、おびただしい数の家畜を愛し惜しまれた神の心が見えなくなる傾向がある（ヨナ4:11）。

日本の状況に当てはめると、反日本文化的あるいは反日的キリスト教は、神

8 彼らは「反文化主義者」であると自認しているわけではないので、反文化主義者として一貫性がないというニーバーのこの批判は適切ではない。

のかたちにつくられた日本の人々による美しい伝統と文化、日本とその人々を愛し慈しまれる三位一体の神の心が見えなくなる傾向があるということになる。

2. 預言者の伝統と祭司的伝統⁹

旧約聖書には、預言者の伝統、祭司的伝統、そして王的伝統がある。本稿の問題を明確にするために、最初の2つを教会が持つべき性質として指摘しておく。

預言者の伝統

ユダヤ・キリスト教の伝統では、王や皇帝には、無条件に権威が与えられているわけではない。権力者は、神の許しの中で、正しく民を導くことが求められてきた。

預言者は王が罪を犯したとき神の裁きと悔い改めのメッセージを王に語らなければならない。預言者は、王から距離を置き、独立した視点を持つ。ときには荒野に住み神の声を聞く。預言者には批判的精神が求められる。

祭司的伝統

祭司は王と国のために神に祈り執り成す。祭司は王と共にあり、国のために神の祝福と守り、憐れみと赦しを祈る。教会は、預言者的批判をするだけでなく、その国を愛し、その国のために、指導者のために祭司として執り成すことが必要である。

反文化的キリスト教は、預言者的傾向を持ち、批判には長けているが、祭司的な執り成しを欠くことが多い。戦後日本のキリスト教は、反日本的になる傾向があり、日本を批判することには熱心であるが、日本を愛し日本のために神に祈り執り成すということには熱心でないといつてよい。

9 筆者は以下でこの点を論じている。藤原淳賀、「ロシア正教会はなぜ大統領を批判できないのか?」『カトリック神学会誌』第34号（2023.8）：23-24。

3. 明治期のキリスト教指導者と愛国心

明治期のプロテスタント教会指導者には、佐幕派の武士階級出身者が多かった。薩摩、長州を中心とした明治政府下で仕官先を見つけることができなかった佐幕派武士階級出身の者たちは、自らの手で藩の汚名を濯ぐことを求め、自らの立身出世を求めた。西洋化が進む中で、洋学を学ぶことは必須であった。

その中で宣教師の人格に触れ、キリスト教に出会い、キリスト者となっていく者が生まれてきた。植村正久、海老名弾正、田村直臣、松村介石^{かいせき}らがその代表である。また新渡戸稲造、内村鑑三のように、宣教師の間接的感化で入信した者もいる。

武士は戦に備える。武士が戦を好むというわけではないが、武士道倫理から絶対平和主義は生まれてこない。日清戦争は支持したが日露戦争に際して非戦論を唱えた内村鑑三、平和主義のフレンド派に改宗した新渡戸稲造、キリスト教社会主義の立場から非戦論に立った木下尚江らは例外である。¹⁰

また明治期のプロテスタント指導者はほぼ例外なく愛国者であった。この時代のキリスト教に反日的要素は見られない。2つのJ (Jesus and Japan) を唱えなければならなかった内村鑑三に見られるように、キリスト者として、日本を愛することと、イエスを愛することに葛藤があったのは事実である。古屋安雄は、「日本のナショナリズムはそのはじめから反キリスト教的な性格をもったナショナリズムだった」と見ている。米国では、クリスチャンであるということと母国を愛することとの葛藤はない。韓国でも同様である。¹¹

今日、日本の牧師で「日本を愛している」と公言するものがどれほどいるだろうか。そしてそれがためらわれるのはなぜだろうか？

パウロはロマ書8章で以下のように語る。

10 木下尚江は、日露戦争に反対して「火の柱」を毎日新聞に記した（1907 [明治34] .1.1-3.20）。『筑摩現代文学大系 5 徳富蘆花・木下尚江・岩野泡鳴集』（東京：筑摩書房、1977）。
https://www.aozora.gr.jp/cards/000525/files/3507_16278.html

11 古屋安雄、大木英夫、『日本の神学』（東京：ヨルダン社、1989）、137。

私は確信しています。死も命も、天使も支配者も、現在のものも将来のものも、力あるものも、高いものも深いものも、他のどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から私たちを引き離すことはできないのです。(ローマ8:38-39)

常にユダヤ主義を最も厳しく批判したパウロは、この直後9章で語る。

私自身、きょうだいたち、つまり肉による同胞のためなら、キリストから離され、呪われた者となってもよいとさえ思っています。(ローマ9:3)

この言葉には同胞ユダヤ人へのパウロの熱い気持ちが現れている。¹²

このような思いが、日本の牧師に、日本の教会にあるだろうか？

おそらく、「自分の国を大切に思っていないわけではないが、日本がしてきたことを全面的に認めるわけにはいかない」という人が多いだろう。しかしパウロもイスラエルの民がしてきたことを全面的に認めているわけではない。彼は、コリントでユダヤ人に対して以下のように語っている。

あなたがたの血は、あなたがたの頭に降りかかれ。私には責任がない。今後、私は異邦人のところへ行く。(使徒18:6b)

そのパウロが同胞への激しい愛を吐露しているのである。

この同胞への愛の欠如は日本宣教において、また健全なキリスト教およびキリスト教文化形成にどのような影響を与えてきただろうか。愛の欠如だけならまだよいかもしれない。日本批判に終始し日本を憎んでいるとなるとどうだろうか？

12 “The αὐτὸς ἐγώ increases the pathos, especially coming so soon after the glowing assurance of 8:38–39; Paul expresses a willingness to be personally isolated from the security of the community of God’s love for the sake of his brothers.” James D. G. Dunn, *Romans 9–16*, vol. 38B, Word Biblical Commentary (Dallas: Word, Incorporated, 1988), 525.

4. 日本の神学 (Japanese Theology) と日本の神学 (Theology of Japan)：北森嘉蔵、大木英夫・古屋安雄

大木英夫と古屋安雄の『日本の神学』は、キリスト教と文化、特に「日本」の問題を考えるときに有益な視点を提供している。¹³大木教授も古屋教授も、聖学院大学総合研究所で一緒に *A Theology of Japan* (モノグラフ・シリーズ) を刊行した筆者の同僚であった。

「日本の神学 (theology of Japan)」は「日本的神学 (Japanese theology)」ではない。

彼らは、北森嘉蔵の「神の痛みの神学」を日本的神学の典型と見ていた。北森は「痛む」「包む」といった日本的感性を通してキリスト教神学に貢献しようとした。北森は、日本的感性をもってギリシア的な「痛まない神」という理解をヘブライ的「我がはらわた痛む」という神へと回復しようとしていた。

しかし大木、古屋は、神学を日本化することを求めるのではなく、日本を、また日本が直面している問題を、神学的に考察することを求めた。それが *Theology of Japan* であった。それは「日本的神学」への決別といってもよかった。

大木も古屋も、戦争を直接経験してきた世代である。大木は陸軍幼年学校に学び、2歳年長の古屋は二等兵として従軍した。日本のナショナリズムがどれほど危険なものであるかを痛いほど理解していた。だから神学を単純に日本化することを避けたのである。彼らは、日本の罪、日本の問題、また日本のキリスト教会の問題を真剣に考えて神学していた。¹⁴

ただ大木は晩年聖学院大学を去る直前に、筆者との個人的会話で、日本的な神学というの必要だと思っていると何度も語っていた。すなわち、一度、「日本的神学」から決別し、その上で日本的な要素を持った神学があってよい、あった方がよいと考えていたのだと思う。

13 古屋安雄、大木英夫、『日本の神学』（東京：ヨルダン社、1989）。

14 大木は、特に日本のプロテスタント教会が分裂状態にあることを憂いていた。

5. なぜ日本のキリスト教は反日左翼的なのか：反日左翼とキリスト教の親和性

左翼と右翼のルーツ

「右翼」、「左翼」という語のルーツは、フランス革命中の国民議会（1789.9.11.）にある。フランス国民は、革命によりアンシャン・レジーム（旧体制）からの自由を手に入れた。しかし平等（経済政策、王の拒否権と貴族院）を巡って対立があった。¹⁵議長から見て右に座ったジロンド派（保守穏健派、自由経済）と、左側（上部）に座ったモンターニュ派（急進派、社会民主的経済）が、右翼（保守）と左翼（革新）という語の起源となる。（聖職者はアンシャン・レジームの第一身分〔人口の約0.5%〕であり、保守的立場であり、保守の側に位置づけられる。¹⁶）

人類は、その歴史において自由と平等を求めてきたが、フランス革命は平等を強く志向した。特権階級のカトリック（と貴族）から国民を解放し無宗教化したところに特徴がある。それに対し、英米のアングロ・サクソンの革命は、キリスト教的伝統を保持した。そしてその中で正義を追求し、平等を求めながらも自由を重視した。¹⁷

日本のキリスト教の左翼運動

15世紀以降、キリスト教西洋諸国は植民地を拡大していく。そして帝国主義的世界の枠組みを形成していく。19世紀に開国した日本はその世界の中で生きることを余儀なくされた。日本の左翼は開国後に形成されていく。

15 フランス国民議会で、(i) 議会在が決定した法律について国王に拒否権を与えるか否か、(ii) 議会は一院制とすべきか、庶民院と貴族院の二院制とすべきかを巡って議論が行われた（1789.9.11.）。国王に拒否権を認め、二院制を支持した人たちは議長から見て右に集まり（保守）、国王の拒否権を認めず、貴族院を否定し一院制を支持した人たちは議長から見て左に集まった（革新）。

16 アンシャン・レジームにおいて第一身分は聖職者（約12-14万人、人口の約0.5%）、第二身分は貴族（約40万人、人口の約1.5%）であり、第三身分が平民（約2450万人、人口の約98%）であった。

17 Cf. セイバイン、『デモクラシーの二つの伝統』柴田平三郎訳（未来社、1977）。

資本家と労働者という階級意識が民衆に生まれたのは1881（明治14）年の「松方デフレ」以降のことであろう。¹⁸資本主義による経済的格差の拡大があり、経済的階級意識が生まれてきた。階級格差批判のためには、西洋から入ってきた「進歩的」思想が用いられた。日本の左翼はこのようにして形成されていった。

左翼は、平等を求め、伝統保持（保守）よりも社会改革を求める。日本におけるこの流れの中に早くからキリスト教徒の存在を認めることができる。そこには弱者救済、平等な社会の形成というキリスト教的善意の反映が見られる。

1898（明治31）年に発足した「社会主義研究会」は、三田のユニテリアン教会いいつかんに置かれ、会長は同教会説教者の村井知至ともよし（1861-1944）であった。¹⁹会員には、ソ連に亡命しコミンテルン幹部となった社会主義者のキリスト教徒、片山潜（1859-1933、モスクワ没）、新島襄から洗礼を受け早稲田大学の安部球場で有名な日本野球の父、安部磯雄（1865-1949）、²⁰幸徳秋水（1871-1911）らがいる。幸徳秋水を除く社会主義研究会参加者の多くがキリスト者であった。

戦後には、共産主義者の牧師も出てきた。（最終的に入党はしなかったが）1949年に共産党入党宣言を行った上原教会の赤岩栄（1903-66、日本基督教団牧師）である。

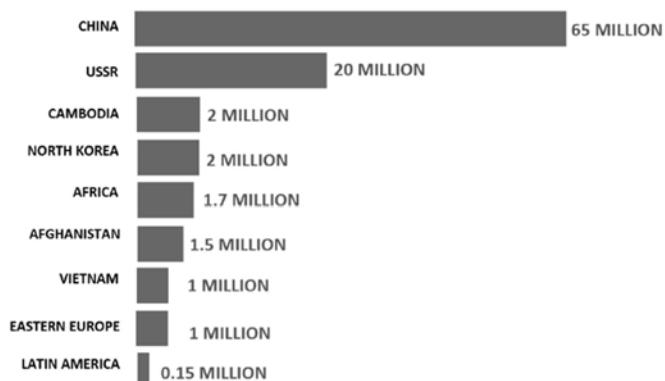
18 西南戦争の戦費を補うため政府は不換紙幣を大量に発行した。これにより激しいインフレーションが起こり、政府は財政危機に直面する。1881（明治14）年、新たに大蔵卿に就任した松方正義は不換紙幣を回収し、緊縮財政、官営工場の払い下、酒税、煙草税などによって増収を図る。インフレを解消しようとした結果起こったデフレーションを「松方デフレ」と呼ぶ。このデフレで農産物価格の急激な下落が起こった。農民は農地の売却をせざるを得ず、自作農は小作農となるか、都市で労働者となった。大量の農地を買い取った地主が生まれた。官営工場の売却は財閥の形成へとつながった。Cf. 池上彰、佐藤優、『黎明日本左翼史 左派の誕生と弾圧・転向 1867-1945』（講談社現代新書 Kindle版, 2023）, 27-8.

19 池上、佐藤、『黎明日本左翼史』, 65-75.

<https://kotobank.jp/word/%E7%A4%BE%E4%BC%9A%E4%B8%BB%E7%BE%A9%E7%A0%94%E7%A9%B6%E4%BC%9A-524575>

20 キリスト教社会主義者、新島襄から受洗。同志社、ハートフォード神学校、ベルリン大学で学ぶ。<https://www.ndl.go.jp/portrait/datas/375/>

Figure 1: Communism Killed Some 100 Million People



Data source: Stéphane Courtois et al., *The Black Book of Communism: Crimes, Terror, and Repression* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1999).

教会はその誕生時に財産を共有し共同生活をしていた（使徒2章）。これは3世紀から始まり今日まで継続する修道院の原型である。²¹

19世紀に思考され20世紀に現れた無神論的共産主義は、疑似キリスト教的ユートピア社会の希求と見ることができると筆者は考えている。この無神論的唯物史観はデモニッシュな結果を生みだしてきた。20世紀に共産主義は殺戮、粛清、餓死者を合わせて約1億人を殺したといわれている。²²これはキリスト教とは全く相容れないものである。（ヒトラーは1000万人を殺害したと言われている。）

21 Cf. 藤原淳賀, 「プロテスタントの視点から考える修道院の重要性について」『キリスト教と文化』35, (2019): 67-95.

22 Romina Bandura, Brunilda Kosta, "The Dangers of Forgetting the Legacy of Communism: Communism as Antidevelopment," A Report of the CSIS PROJECT ON PROSPERITY AND DEVELOPMENT and CSIS PROJECT ON MILITARY AND DIPLOMATIC HISTORY, CSIS (Center for Strategic & International Studies), (2018): 1-2. https://www.researchgate.net/publication/324755193_The_Dangers_of_Forgetting_the_Legacy_of_Communist_Communist_as_Antidevelopment
含図表。以下も参照せよ。R.J. Rummel, "HOW MANY DID COMMUNIST REGIMES MURDER?" (Unpublished essay, November 1993.)
<https://www.hawaii.edu/powerkills/COM.ART.HTM#>

このように左翼的キリスト教は戦前から見られる。戦前に見られなかったのは反日的キリスト教である。これが戦後に現れ、現在にまで続いているのである。

反日的キリスト教の要因

キリスト教が反日的性格を持つに至った要因として以下の4つが考えられる。

第一に、日本は、その歴史の中で、キリスト教を迫害してきた。信長は、キリスト教に対して好意的であり、16世紀の日本でキリスト教は広がっていったが、秀吉、家康により禁教され、キリシタンは凄まじい迫害を経験した。

開国（1854〔嘉永7〕.3.3.）後も、日本は19年間キリシタン禁令を解かなかった（高札撤廃は1873〔明治6〕.2.24.）。²³

明治以降、日本は国際化の時代にはキリスト教に対して好意的であったが、国粹的時代においては、反キリスト教的であった。²⁴特に昭和最初の20年は、キリスト教会、キリスト教学校が日本政府から厳しい弾圧を受けた国粹的時代であった。自分の親族が迫害を受けた者はその痛みもあり、更に反日的になりやすいであろう。

第二に、戦後は日本全体が反日的になっており、教会もその影響を受けた。占領下、GHQ検閲により米国や連合国（United Nations）への批判は許されなかった。実際に発行停止処分も行われている。これは報道機関にとっては致命的である。^{あつもの} 龔に懲りた報道機関は、「安全な」記事を書くことに終始した。さらには戦争を含めて日本とその歴史を批判的に書き、日本の伝統に対して否定的に表現する傾向が生まれてきた。²⁵

それに加えてGHQによる公職追放があった。保守的立場の人々の多くが、

23 1873.2.24に政府は、政府は、太政官（だじょうかん）布告第68号により、キリシタン禁制の高札を撤去した。https://www.archives.go.jp/ayumi/kobetsu/m06_1873_02.html

24 古屋安雄の「20年周期説」を参照。井上哲次郎『教育と宗教の衝突』（敬業社, 1893）。

25 江藤淳、『閉ざされた言語空間：占領軍の検閲と戦後日本』（文春文庫, 2024）。

学校、大学、マスコミ、言論界から追放された。左翼的立場の人たちがそれらの場を埋めた。そして彼らが、影響力を持つようになった。(ただその後、中国、朝鮮半島で居運主義が勢力を拡大し、労働運動が過激化する中、GHQは方針を変え、レッド・パージ〔共産主義者の追放〕を行うことになる。) 占領期GHQの政策、検閲が戦後日本の親米、反日的世論を形成する土台となった。

また日本教職員組合（日教組, 1947- ）の影響もある。旧日本社会党、日本共産党と強い結びつきを持ち、86.3%（1958年）ものの加入率を持った日教組の存在は世論形成において大きかった。²⁶その教育で育てられた世代がいま社会の中核にいる。筆者も、違和感を感じ自分で研究するまで、日教組の先生方に教えられた「戦後世代」として、反日左翼的であった。

第三に、教会の戦争協力への自己批判と謝罪意識がある。戦後の世論の影響もあり、日本の戦争と日本の伝統への批判へと向かう強い傾向が教会にも生まれた。特に日本のプロテスタント教会は米英との強い関係がある。米英に対する戦後復興援助への感謝と憧れ、戦争協力への自己批判は教会を反日的方向（日本の伝統批判・欧米文化志向）へと向かわせた。

第四に左翼が持つ反伝統的性質がある。左翼は「進歩的」ともいわれることがあり、革新的である。伝統尊重よりも現状変更を求める。反伝統的であるということは、日本においては反日となりやすい。

もともと反伝統的であったところに、ナイーブな日本的謝罪意識と左翼的弱者救済が加わった。戦後、日本が急速に豊かになったこともあり、左翼は近隣諸国への謝罪・援助という方向に向かう。敵（日本）の敵は味方ということで

26 日教組は、現在では勢力を弱めているが（加入率は毎年低下しており[47年連続低下]、2023年は過去最低の19.2%）、かつては旧日本社会党、日本共産党と強い結びつきを持ち、86.3%（1958年）の加入率があった。

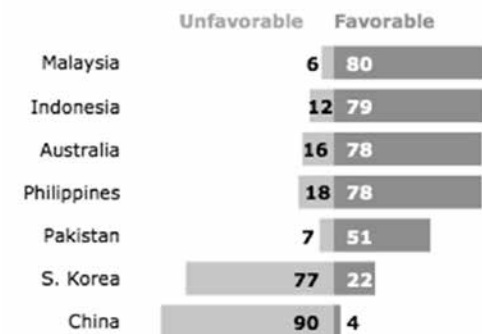
「日教組の組織率20%割れ 過去最低、文科省調査」日本経済新聞 2024.3.2.

<https://www.nikkei.com/article/DGXZQQUE01DL40R00C24A3000000/>

「日教組加入率・新採加入率の推移」文部科学省2019.3.1

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/jinji/_icsFiles/afieldfile/2019/03/01/1413032_03_1.pdf

Japan Generally Seen Favorably



PEW RESEARCH CENTER Q9v.

あろうか、反日左翼は中国、韓国を中心にした内外の反日勢力と結びつく傾向がある。²⁷

これはキリスト教会に限ったことではないが、キリスト教会にも見られる。

しかも非常に重要なこととして、歴史的事実に基づかない謝罪という問題がある。日本

人独特のナイーブな謝罪感覚もあり、歴史的事実が認められないことについても、日本を貶め、「とにかく謝罪する」ということがしばしば行われてきた。²⁸ 今でも謝罪外交を続ける人たちがいる。歴史的事実に基づかない時、相互理解に基づいた和解は実現せず、不毛な謝罪外交が継続することになる。²⁹

6. 文化の変革：日本のキリスト教に欠けているもの

筆者は、2012年から8年間、当時まだスタンリー・ハワーワス（Stanley Hauerwas, 1940- ）やリチャード・ヘイズ（Richard B. Hays, 1948-2025）がい

27 あまり報道されないが、中韓を除くアジア諸国は日本に対して好意的な態度を持っている。Pew Research Center, “Japanese Public’s Mood Rebounding, Abe Highly Popular: China and South Korea Very Negative Toward Japan,” (2013). 図は記事からの引用。
<https://www.pewresearch.org/global/2013/07/11/japanese-publics-mood-rebounding-abe-strongly-popular/>

28 特に朝日新聞はその中で重要な役割を果たしてきた。

29 Cf. J・マーク・ラムザイヤー、『慰安婦性奴隷説をラムザイヤー教授が完全論破』, 藤岡信勝他訳, (東京：ハート出版, 2024)。

たデューク大学神学部と共に、日中韓米のキリスト教的和解の働き（「北東アジアにおける和解のためのキリスト教フォーラム [Christian Forum for Reconciliation in Northeast Asia]」、以下「和解フォーラム」）の働きを中核的に担ってきた。

筆者は、キリスト教とナショナリズムの問題について、それぞれの国のキリスト教が、自国の排他的なナショナリズムに批判的（預言者的）でなければならぬと論じてきた。他国の批判をする前に、まずは自国の批判をすべきであると考えたからである。

韓国、中国のキリスト教が自国のナショナリズムに対して極めて寛容であることはよく知られている。ドイツ・キリスト者（Deutsche Christen）の排他的ナショナリズムについては言うまでもなく、イングランド国教会においても植民地支配の歴史を厳しく批判する様相は見られない。それらと比較して、日本のキリスト教は、規模は小さいが、いや小さいからこそ、日本のナショナリズムについては非常に敏感である。自国のナショナリズム批判ができるということは、健全なキリスト教の一つの特徴である。

しかし最近、日本のキリスト教の大きな問題に気づいた。日本のキリスト教は、確かに日本のナショナリズムに対しては非常に敏感に反応するのであるが（預言者的機能）、むしろ反日左翼の傾向を強く持ち、日本と日本人に対する愛といつくしみが欠如しているのである。

「和解フォーラム」に何度も来られた重鎮の日本の牧師（故人）がおられた。筆者が尊敬する素晴らしい方であった。しかし彼はフォーラムで反日的、あるいは侮日的発言を繰り返す。日本がいかにかひどい国であるかを世界に知らしめたいという思いがそこに表れていた。日本は劣悪な国であると発言する事によって、他国からの参加者に褒めてもらい、あるいは慰めてもらおうとしているかのような場面が何度もあった。私はこれに驚いた。

自国の罪について敏感であり、歴史的事実に基づいて悔い改め謝罪することは当然必要なことがらである。しかし、歴史的検証を行うことをせず、自国を憎み貶めているだけでは、健全なキリスト教は形成できず、健全な国際関係も

構築できない。

2-30年ほど前から「いつまで謝罪を続ければいいのか」という声を青年たちから聞くようになった。伝道の観点からみても、そもそも自分たちとその歴史を憎み、歴史的事実に基づかず不当に貶める反日左翼のキリスト教のメッセージを日本の人々はどのように受け止めるだろうか。

文化を変革するキリスト

H・リチャード・ニーバーは、『キリストと文化』のなかで最も優れたキリスト教のあり方として第5のタイプ「文化を変革するキリスト (Christ the Transformer of Culture)」を挙げている。それに見られる要素は以下の3つである。第一に、よき天地創造の理解。墮落してしまったが、本来よきものとして創造された世界を前提としていること。第二に、深き罪理解があること。ルターの「十字架の神学」は、よき創造よりも罪と贖罪を重んじる傾向がある。しかし本来のよき創造があり、それが墮落していること、そしてそれはこの後に回復されるという視点が必要である。第三に、神が今ここにおいて働かれているという実存的歴史理解。神の働きを経験するために終末まで待つ必要はない。神は今ここにおいて既に働かれている。私たちはその神の働きに応答しなければならない (Responsible Self)。

このタイプの代表の一人であるアウグスティヌスは、ローマの深き教養を持っていた。彼は、崩壊しつつあった5世紀のローマ帝国をキリスト教化（変革）することによって救おうとしていた。³⁰決して反ローマ的であったわけではない。

またリチャード・ニーバーは、教会が直接社会に関わり歴史を動かそうとするよりも、神がいかに働いておられるかを見極めることを重視していた。それは満州事変を巡って『クリスチャン・センチュリー』誌で行われた、兄ライン

30 Cf. C・N・コックレン、『キリスト教と古典文化』金子春勇訳（東京：知泉書房、2018）、876-882.

ホールドとの論争にも表れている。³¹

ニーバーの文化変革の基準から見ると、反日左翼的キリスト教は日本文化を変革し、健全なキリスト教と国際関係を形成していくものとは思われない。

筆者は、日本の教会は、日本に対する愛が欠けていると考えている。神が愛されるように、同胞への愛を持つ必要がある。そしてこの国が作り出してきた美しい伝統と文化を見る心を養う必要があると考えている。その欠如が現在の日本のキリスト教の大きな問題だと考えている。祭司的性質の欠如といってもよい。

日本を超える故郷、神の国への愛

さらに教会は、日本に対する愛を持ちながら、その罪を見、神の国の視点から、日本文化を変革し、排他的ナショナリズムを批判し、超えていかなければならない。

日本を最も愛したキリスト者の一人、内村鑑三の以下の言葉は、このことを考えるために有意義である。

青年期に抱いていた、わが国に対する愛着はまったくさめているものの、わが国民の持つ多くの美点に、私は眼を閉ざしていることはできません。日本が、今もなお「わが祈り、わが望み、わが力を惜しみなく」注ぐ、唯一の国土であることには変わりありません。³²

その内村は以下のように語る。

武士道は、まだ未完成なもの、現世的なものであります。美点が多くあるにもかかわらず、それは、たとえば世界に無比の富士山のようなものです。世界に無比ではありますが、結局は死せる山にすぎません。また、たぐいなき桜のようなものであります。所詮散りゆく花にすぎません。したがって、武士道がいつの日かキリスト教にとって代わるとか、武士道それ

31 H. Richard Niebuhr, "The Grace of Doing Nothing," *Christian Century* 49 (1932), 378-80. Reinhold Niebuhr, "Must We Do Nothing?" *Christian Century* 49 (1932), 415-7. H. Richard Niebuhr, "The Grace of Doing Nothing," *Christian Century* 49 (1932), 378-80.

32 内村鑑三、『代表的日本人』鈴木範久訳（岩波文庫 Kindle版, 2012）, 11.

自身は優れているので、それだけで十分であるというふうに、だれも考えてはなりません。³³

富士山を死せる山と呼び、桜を散りゆく花に過ぎないというこの愛国者の心は、キリスト者として覚えておくべきものであろう。日本を愛しながらそれを越えていくのである。それはわれわれの真の故郷が天の御国であるからである。

結論

本稿の結論は以下のようになる。

第一に、教会には社会に対してまた個人に対して預言者的（批判的）機能と祭司的（執り成し）的機能がある。戦後の日本の教会は、日本のナショナリズムに対して非常に敏感であり、批判については十分に機能しているが、祭司的要素が薄い。

日本の教会に著しく欠けているのは日本と同胞への愛である。神の掟（ἐντολή）は、神を愛することと隣人を愛することである。³⁴同胞への愛無きキリスト教は健全なものではない。また事実に基づかない隣人、諸国への謝罪外交は隣人、諸国に対する健全な愛ではない。

第二に、教会には常に保守（右翼）的傾向と革新（左翼）的傾向がある。教会は、その2000年の歴史の中で、周辺に追いやられた人たちと常に共にあろうとしており、また既得権者を批判するという観点からも、革新な側面があった（フランシスコ会、解放の神学、社会的福音）。また明治期から社会運動にキリスト者が多く関わっている。

教会はまた、社会形成と安定に大きな役割を果たしてきた。これは保守的側面である。西ローマ帝国が崩壊（476）していく中で社会の安定を保持したのはローマ・カトリック教会であった。また混乱した中世に文明を再びもたらすのに修道院が大きな役割を果たした。

³³ Ibid., 165.

³⁴ マタイ22:36-40、ヨハネ13:34-5、1ヨハネ2:3-8、2ヨハネ4-6。

明治以降のキリスト教会は、他の日本人と同様に愛国心を持っており保守的傾向もあった。ただ明治日本は、西洋キリスト教諸国へのリアクションとして、強烈に天皇制へと振れた。その中でキリスト者が愛国心を持つ場合、(i) 内村の「2つのJ」に見られるように緊張関係を持ってキリストへの愛と日本への愛の両者を（神を第一として）保持するか、(ii) 海老名の「神道のキリスト教」のように両者を融合するかであった。そして「融合」は伝統的キリスト教教理から逸脱する傾向があった。

その結果、教会は、保守から離れ、革新へと向かった。日本の伝統を批判し、否定することと、「進歩的」左翼的思考には親和性がある。愛国心、日本の伝統の尊重に教会は熱心でなくなった。更には反日的であることが、キリスト教のあるべき姿であるように考える者も出てきた。日本批判と、反日的近隣諸国との協力が結びついた。

第三に、保守的視点を失った教会は、批判と破壊へ向かいやすい。与党を批判することに終始する万年野党のようなものである。教会紛争もこの中に位置づけられるかもしれない。そのような教会には、この国にどのような文化を形成していくかという視点は見られない。反日左翼的キリスト教が政治活動を行う場合、政府への反対声明、デモ参加、異なる立場の人々への批判に終始する傾向がある。また国民の安全に対する責任感もないため、いわゆる「お花畑的絶対平和主義」以外の現実的な政治的代替案を出すことはない。

第四に、無神論的唯物史観に立つ共産主義とキリスト教は相容れない。「敵（日本）の敵は味方」と考える人がいるのかもしれないが、それは危険なことである。

反日左翼的キリスト教は、日本を批判し伝統を破壊するが、キリスト教と日本の伝統に基づき日本文化を変革し建て上げていくという関心はない。

私たちは、同胞への熱き愛を持ったパウロを覚え、エルサレムを見て心を傷められた主イエス・キリストを覚え、ニネベを愛された神を覚えなければならない。私たちは21世紀の日本における伝道、教会形成、文化形成を託されているのである。

（ふじわら・あつよし）